氣の毒な人無腸

教授　高木市之助

芭蕉とか西行とか、乃至は近頃大流行の良寛などゝ云ふ人々は確かに偉いには相違ない、時代を隔てた吾人をも動かす丈けの尊いものを持つて居る。併し假りに之等の人々が、其儘の素質を持つて現代に生存したとしても吾人は、其思想なり藝術なりが、今日遺されて居る以上に若しくは以外に遠く乘り出して來るだらうと期待する事は出來ない樣である。つまり偉いながらに、大きいながらに、到底あれ丈けの人なのであらう。

所が茲にさうでない人がある。彼がもしあゝ云ふ時代に生まれなかつたなら――少くとも今生まれたなら――どんなに幸福だつたか知れない、其思想や藝術がどんなに大きく成長したか判からない。こんな、丁度未成品に對する樣な興味を誘ふ人々がある。殊に我國では、最初固有文明と外來文明との距離が（程度から云つても性質から云つても）あまりに甚しかつた爲に、一種の民族的早敎育を受けなければならぬ事となり延いて偶像や型を造る事ばかりが上手になつたり、又封建時代では例の幕府の政策上、國民が思想の上に一種の營養不良に罹つたりした處から、此種の人即ち可也自由な思想を持つて居ながら之を養ふ水と日光とを欠いた爲につい若々しい芽のまゝで其を枯らして了つた樣な人、又は其芽がモ少し伸びはしても矢張り何處かで此周圍から矯められなければならなかつた樣な人は隨分多數に見受けられる樣である。無腸居士上田秋成なども矢張り其一人であらう。丁度先月國書刊行會で其全集を出版したので彼に對する興味が新たになつ

たのを幸に、此の氣の毒な文學者を紹介して見る。

殆ど三世紀に亘る永い江戸時代の中で、餘り派出ではないが非常に興味のある一時期がある。それは文化の中心が上方から江戸へ移つて行かうとする過渡の數十年(享保――寛政)で、文壇でも、近松や西鶴や芭蕉は沒し、馬琴や種彦や景樹はまだ名を成さない、謂はゞ兩盛期の中間にはさまつたさびしい時代ではあるが、仔細に觀て來ると、そこに又、兩盛期には見られない樣な人や作品が生まれて居る。中でも一番面白く感ずるのは、皮肉味が著しく濃厚な事である。元來我國の文學には、この皮肉諷刺などゝ云ふ性質を持つて居る作品が特に少い。が其少數の中で比較的面白いと思はれるものは、殆どすべて此時代に生れたと云つても、たいした誇張でない程である。俳壇には「白壁のそしられながらかすみけり」『故郷は蠅まで人をさしにけり」などゝ云つた一茶が居るし、風流志道軒傳の作者風來山人平賀源内、稍後れて浮世風呂、浮世床の作者式亭三馬なども我國では、まづ一等の皮肉屋に數へられて居る。畫界の事は不案内だが、丁度此時分に出た曾我蕭白などゝ云ふ人も、其怪奇鋭峻な線や、古畫備考などに見ゐる逸話などから想像すると、矢張り多少此味を持つた人らしい。又「穿ち」を生命として居る一種の市井文學川柳といふものが流行して來たのも丁度此時代に當る。尤も之等が一時期に集つて居るのは單に偶然の現象で別に意味は無いと考へられない事もない。又現に其一々に就いて精査して行けば、それ〴〵の性質には大分相異がある、後に述べる積りであるが、三馬と秋成との間にも、同じ皮肉とは言ひ條、餘程の相異がある。併し、どんなに直接な交渉を相互に持つて居る文學でも、究極まで對比して行けば、意外にちがつて來るのが普通である。例へば瓜二つの姉と妹とを

一所に並べて見るとまるでちがつて居る樣なものだ、ちがつて居るからと云つて二人の血族關係を疑ふ事は出來まい、之等の皮肉文學を細かに點檢して行つて、そこに多大の相異點が見つかつたから、之等は單に偶然時を同じうして出た丈けの事、相互には、或は時代とは無關係だと考へるならば、それは丁度此の喩へで、姉妹關係を疑ふと同じ事になりはしないだらうか。要するに、自分は、細かい事は姑く措き、至極大まかに廣義に皮肉と云つた風の味に於て、之等の諸作品が不思議にも一致して居る事を、誠に面白く思ひ、且つ此の現象がこの時代に對し、キツト重要な一の說明となり得る事をも信じたい。秋成が生れたのはかう云ふ時である。

素生に就ては、言狂作書に、當時有名な崇禪寺馬場の敵討の主人公（かたきの方で、而かも相手を返討にして評判の惡かつた男）生田傳八郎といふ武士が、曾根崎の茶屋花屋の娘に馴染んで生ませた子だと云ふ說を載せて居るが、之は曾て竹の屋主人が論じた樣に、時代も齟齬し、出典も兎角出鱈目の多い本であるから多分何かの誤であらう。併し彼の自作？の塑像（今も遺つて居る）の箱に自身で書きつけたと云ふ自傳めいた短文の中に「無レ父不レ知二其故一」と云つたり、又彼の隨筆膽大小心錄中に、例の皮肉交りに、

「三井は浪人者、白木屋はきせるや、鴻池は小酒屋、小橋屋は古手屋、辰巳屋は炭屋也。神代から續いてある家の樣に誇る事おかしゝ。老はにくんで茶屋のはてじやといふゝいや太皷持古なつたのぢや。答へる穢多でさへなけりや御めんの人交り、何にもせよかし、たゞ今は山の大將我一人、お相手がござつしやるまい。

なぞゝ云つてゐる處から想像すれば、彼の父が浪人者か放蕩者か、兎に角あまり物堅い一生を經た人では無いらしい事、又彼の生ひ立ちがお茶屋と多少の關係があるらしい事などは先づ信じて差支ない樣な氣がする。

彼の少、青年時代も甚だ漠として居る。唯四才で生母が亡くなり、堂島の上杉茂助といふ士族出の商人へ養子に行き、六才で其處の養母が又歿して更に三度目の母に養はれたと云ふ事などが、此時代の主な境遇の變化であるらしい。尙こう云ふ天才肌の人によくある樣に、彼も亦可也病身であつた樣だ。中でも五つの年に天然痘を患つてそのために右の中指が小指の樣に短く、左の食指が短折になつて居たり、持病として時々驚癇の發作に襲はれたなどは、近頃の天才宗の信者達のうれしがりそうな事共である。又彼が度々紀崎の温泉などへ療養に出た事實も、彼が自から評した「性多病」の語に裏書して居ると云ふべきである。若い時分の彼に就いて知られて居るのは略之丈けであるが、更に後年の作品などを加へて考へて見れば、此の頃の彼の生活は略想見する事が出來る。三十三才の時に出版した世間妾形氣を見ると、所謂惡所の描寫などには、無經驗者の企及し難い精細を持て居るから、從來の評家の屢論じて居る通り、彼の若い頃には可也放埒に浮身をやつしたものであらう、彼自身も「翁商戸の出身、放蕩者ゆへ家財をつみかねたに云々」などゝ告白して居る。此の遊蕩生活が彼の心の成長に幾多の障礙を與へた事は固より疑ふ餘地の無い事であるが、唯彼をして平氣でこんな生活を營ましめた養父母の放任主義は、この異常の天才をのび〳〵と發育せしめる上に、多大の効果があつたに違ひない。彼の病身、殊に驚癇の持病、又兩親が養父母として彼を熱愛して居た事、（養父が彼をどんなに愛して居たかと云ふ事は全集中の歌島稻荷社献詠和歌序並に跋で窺はれる、又一般に養父

母の愛といふものは到底嚴格になり得ない程憶病なものだ）養父が國學好きのおとなしい商人だつた事などはいづれも十分に此の想像を助けて居る。彼が妾形氣や諸道聽耳世間猿などを出した時の匿名を和譯太郎と云つて居るが、彼の生ひ立ちは恐らく此四字に盡きるだらう。つまり詩人、天才などゝ云ふたちの人に最もふさはしい生ひ立ち、所謂しつけ（躾）（しつけとは徹頭徹尾世間に順應して行ける樣に人間をこしらへ上げる事である）から最も遠ざかつた生ひ立ちを經驗した事になる。困つた放蕩者が此家庭から生れた、併し同時に一代の鬼才も亦其處から生れたのである。

此時分の彼を考へる上に、更に逸してならぬ事は、文學上の修養である。けれども不幸にして此方面には確實な材料が無い。唯前記妾形氣などから推して、彼が其遊蕩時代に、其頃流行の八文字屋本や浮世草子をどんなに愛讀して居たかは略想像がつくし、又二書に縱橫に引用してある古今東西の故事は、彼が當時既に相應に和漢の學に通じて居た事を語つて居る。又養父の嗜好に誘はれて早くから歌道を學んで居た事は、其歌文集から推量出來るし、殊に三十三才から師事した眞淵門の高弟加藤宇萬伎が深く彼を尊敬して、殆ど友人として取扱つて居るのを見ても、彼が當時既に一角の歌人だつた事が知れる。又此頃の遊び人が誰も皆一度はやつて見た樣に彼も亦、時に俳諧に夢中になつたらしく、彼が自から「わかい時は人まねして俳諧と云ふ事を面白くたふとがりしが、歌よみならひてのちも時々云ひてたのしむ也」と云つて居るに徵すれば、俳諧は寧ろ歌道以前に習つたものと思はれる。

まづこんな風に彼の若い時代が過ぎて、二十九才植山氏（名は玉）を娶つた頃から、彼の中年時代がはじまる。文學者としての彼、孤獨峻烈な彼、つまり最も彼らしい彼の姿が、此頃から漸く顯著になつて來る樣だ

尤も境遇としては、尙數年間は頗る平穩であつたらしい。彼の作中で比較的まとまつた小說的述作は三部共此間に成つた。前出諸藝聽耳世間猿、世間妾形氣及び雨月物語である。次で、三十七才養父の死と共に、彼の境遇に一轉機が來た、歌や小說ばかり作つて居た此遊び人は、急に算盤を手にして帳場に坐らなければならなくなつた。けれども幸にして？其翌年、店が火事に遭つて破產してしまつたから、こう云ふ不得手な生活もそれで濟んだ。これからが內外共に眞に彼自身の生活である。左に彼の膽大小心錄中の一節として最も簡潔に、最も力强く、其大体を語らしめよ、

（略）三十八才の時に火にかゝりて破產した後は、なんにも知つた事がない故、醫者を先學びかけたが、村居して先病を澤山に見習ふた事じや有た。四十二で城市へかへりて、業をひらいたが、不學不術のはづの事ゆへ、人の用いぬ事は知つて居が故、たゞ醫は意じやと心得て、心切をつくす趣向がついて、合點のゆかぬ症と思へば、たのまぬに二三べんも見にいた事じや。いや〳〵と思へば、外の醫士へ轉じさせても、相かはらず日々見まふた、こをじや故、病人もよろこぶ、家族もとかくうけがよかつたで、四十七の冬家を買て、さつぱり建立して、四十八の春うつつた。十六貫目入たが、なんでやら出來た事じや。醫になる始に願心を立て、金口入、太鼓持、仲人、道具の取次はせまいといふて、一生せなんだ事じや。それ故、病症がくるしめて、五十五の春から又醫をやめて、二たびの村居、母が前へひたいをつけて、不孝の罪此上なしと申たれば、はてなんとしやうとあつて、姑母もひとつにして、草庵つくりて住だ事じや。母は五年すんで、大阪の別家へ七月から遊びにでられて、老病で霜月に死なれた、年は七十六、姑母は母より先に六月に死なれた。夫から夫婦の心、甚めつそうになつて、髮をおろして尼となりしが、瑚璉と名を付た

いかにと問た故、字はまゝの皮じや、コレ〳〵とよぶに勝手がよさじやとこたへた、姑母のものも母のものも、無益なは賣拂ひ、高三四百目あつたを、ふところにして、度々京へ遊びにのぼつた事じや。尼はもと京のうまれじや故、住たいと云ゆへ、まあこゝろみにちよつと智恩院の前へ腰かけて、遊びはじめたが軒向は村瀨嘉右衛門、月溪がよろこんで、出會互にしきり也。酒は尼が好故、月子とのみ友だち、豆腐つくしの酒もり、又南ぜん寺の草庵をかりて移つたが、こゝもいはくがあつて、東洞院の月溪と同じ長屋住に成たり、ちといはくがあつて、又衣棚の丸太町、そこにも尻がすはらず、もとの智をんゐんの門前のふくろ町のふくろへはいつていつたが、尼がとん死の後は、目が見ゐぬやら何じややら、不幸づくしの世を又一年くらして、羽倉といふたくらうどの所へちよつとこしかけたは、つい死ぬであろの覺悟であつたが死なれぬゆへ、又南禪寺の昔の庵のあつた所へ小庵をたてゝ七十三才の春うつり申た。大坂から金百七兩で上たが、ことしで十六年、何でやらくらした、蘆庵がすゝめる人よせしたら、用意金は三年になくすべし、麥くたり、やき米の湯のんだりして惜からぬ命は生る事じやが書林が賴む事をして十兩十五兩の禮を取て、十二三年は過したが、もう何もできぬ故、煎茶のんで死を極めて居る事じや。

これは、彼の死ぬ一年前、七十五才の時に出來た文であるが、殘りの一年間もまづこんな生活の繼續であらう。彼の面目が如何にも躍如として居るではないか。唯洒々落々を裝ふ其態度に欺まされて、彼を一樂天家と誤解してはならぬ。眞の孤獨は表面案外呑氣に見ゐるものだ、丁度雄辯家がふだん意外に無口な樣に。けれども少し氣をつけて見れば、まざらした其陽氣の奥に住んで居る凄い程のやるせなさ、さみしさを看取する事が出來よう。尤も彼の如上の生活が尊いのは、それが單に孤獨だからでは決して無い、――孤獨は

動もすれば單に孤獨なるが故に尊いものと考へられる、併し之は云ふまでもなく、大變に間違つた感傷的見解である――彼の孤獨が弱い、憶病なそれでなくつて、飽くまでも、強い、自由なものだからである。彼は寧ろこの自由、此の强味を把持するがためにこの孤獨を選んだと思はれる位である。彼の生活が光つて見ゐるのは此點にある。此の心持は、當時流行の似而非風流者流の生活が、無欲に見ゐて貪欲な、高尚に見ゐて卑俗なのを痛烈に罵倒した左の一節からも窺はれるであらう。

儒者歌よみと云ふも、皆々商店で、けつく老(自稱)がやうな閑寂の世はへぬ事じや、あはれな者どもじや。又老がまねではなしに、隱者じたてゞ筆畊を業とする人があれど、老がやうに世は廣がられぬとみゐた云々(膽大小心錄)

彼の生涯の著書は、四十余部百數十卷に上つて居る(中で今日に傳らないもの數部)。一面に學者であつて同時に他面に詩人であつた彼の事だから、其著書も亦自のづから此兩方面に別けられる。學問關係の著作としては、歌聖傳、萬葉集會說、金砂、同剳言、(以上萬葉に關する研究)呵刈葭、安々言(以上國學者に對する論爭、前者は宣長と交換した書簡を對照したもの、後人の出版に係る)也哉抄、冠辭考續貂、靈語通(以上語學上の研究)其他。文學的創作としては、前記三部の外に、藤簍冊子(歌文集)秋の雲(自讃、自記の歌)去年の枝折(紀行)餘齊文集(餘齊は彼の別號)春雨物語(短篇小說集)癇癖談(小話集)膽大小心錄(隨筆)其他數部がある。併し之等を一々紹介批評して行く事は本文にとつては不適當且つ不必要であるから、之は一切拔きにして直ぐに前記の經歷と之等の著書とを透して彼の「人」を考へなければならぬ。

一体、今日一般に使用する皮肉と云ふ言葉の意味は可也混雜したもの、樣である。秋成なども一般に皮肉

な人と考へられて居るが、彼の皮肉は、はじめに一寸云つた樣に、三馬などのとは大變ちがつた處がある。皮肉とは元來、本質に附した名稱ではなく、觀照の態度に附けた名前なのである。皮肉な人だと云ふ事は、實は、皮肉な考へ方、觀方、言ひ方をする人だと云ふ意味なのだ。けれども、態度と性質とは、往々にして相伴つて來る處から、「皮肉な人」と云ふ語の中にも、必然に、此態度に相應する、或は此態度を採らしめる或る性質を豫想する事になる。之が意味に混雜を來す原因であらう。秋成の皮肉と三馬の皮肉と大變にちがふと云ふ事にも、實は此混同が入つて居る。つまり、嚴密には、秋成と三馬とは態度に於て共通であるが、此態度を採つた本性に於て、大變な相違があると云ふ事になる。二人者は、齊しく、ヂロリと見る眼と、ニヤリと笑ふ口の所有者であつた。しかし、三馬の悧巧な心の代りに、秋成は正直な心を持つて居た。悧巧な心から出た皮肉は、自分を防衛したり、對手に多少の毒氣を送つたり、第三者を面白がらせたりする以上にはたいした事もないが、皮肉が一度び正直な心と結びついた時には、人は、或は社會は、彼の前に、有らゆる衣裝を引き剝がれて、赤裸で立たされなければならぬ。浮世風呂と癇癖談との相違はこゝにある。例へば、前者にも、醫者や儒者の衒學や、糊塗は屢々描かれて居る。其等は固より膝栗毛式の太平な滑稽では無くつて、矢張り一味の皮肉を持つて居る。けれども何處かに讀者を安心させて居る處がある。之は要するに、三馬自身が時と場合によつては、かう云ふ法螺や胡麻かしも亦已むを得ないとゆるしてやる程に聰明な男であり、又自分の著書の中で、それとなく自家發賣の化粧水を廣告する程に如才のない男だからである。癇癖談の皮肉は大分之と趣を異にして居る。丁度之に類似した材料に對し、彼は、

むかし、鳥獸草木のたぐひの、世に見知らぬをば、あまねくよく見わかつ師ありけり、こはもろこしにて

なにといふを、此國にてはしかよぶものなりなど、いともくはしかりけり、されどまれ〳〵には、わきまへがたきものもあるにや、此は何の類なりとも答へらるゝを、或人これを聞きて、何の類の類の字は、祇園町のむすめぶんの分の字にひとしく、いとまぎらはしとなんいひける（同書下）

と云ふ。道がの三馬も思ひつくまいと思はれる程に面白い比喩である。併し、このむすめ分の分の字の前に誰でも安心して笑つて居られたゞらうか。彼は又こんな皮肉を云ふ、

むかし、俳諧のすきびとありけり。芭蕉の奥の細道のあとなつかしく、はる〳〵のみちのくに下りけり。ある國の守の御城下にて日くれなんとす、一夜あかすべき家求むれどあらず、思ひつかれたるに、そこに門立したる翁のあるに、立ちよりてねんごろに宿をもとむれば、翁うち見て、法師は達磨宗なるかと問ふいな、さる修行にあらず、ばせをの翁のながれを學ぶものなるが、松が浦島、象潟のながめせむとて、はる〳〵と來れるなりと云ふ、おきな聲あらゝかにて、何がしどの御下には、俳諧と博奕うちの宿する者は無きぞと云ひけるとなり、いかなれば同じつらに疎まれけむいとあさましくなむ。（同書、下）

之を讀んで、平氣で、俳諧者流を嗤つて居られたのは、もしかすると、博奕うち丈けだつたかも知れない、これは、皮肉を透して彼の正直が迫つて來るからである。「正直程厭味の無いものはない」と云つた「三四郎」の言葉が眞理ならば、一事一物として、正直なものゝ殘つて居ない周圍が、たつた一つの正直なものなる彼の心にどんなに厭味に映つたかは略想像するに難くない。此厭味に對する反撥、それが彼の皮肉である。否彼の晩年に於ける全生活であつたかも知れない。此正直は、本來の素質でもあり、自由な其生ひ立ちに負うても居る。此正直を僻みと解し、其原因を繼母子關係で說明しようとする傾向のあるは、彼にとつて最も氣の

毒な事である。妾形氣が、當時案外人氣を招ばなかつたのも、色々事情もあるだらうが、一方には、此正直此野暮が當時の通人(八文字屋本愛讀者)と全然表裏して居たからであらう。

此種の皮肉が最も鮮明に出て居るのは、前記痼癖談と膽大小心錄とである。前者は「くせものがたり」と訓んで伊勢物語に擬して、彼の周圍のくせだの、或は人間全体のくせだのを摘發して行つたもので、其体裁、文体が既に內容に對して、一種の皮肉となつて居る。後者は、これまでに幾つも例出した樣に、最も自由な文体で、隨時彼の所感を書き附けた小冊子であるが、偶像破壞的の彼の思想と、皮肉な其態度とに充ち滿ちた、少くとも日本の奇書である。彼の筆は、殆ど方向を選ばず荒れまはつて至る所に偶像を破壞し、厭味を唾棄して居るが、中でも一番烈しいのは、此種の人から、いつでも先づねらはれる例の「大家」といふ偶像である。

應擧は度々出會したが、衣食住の三つにとんと風流のないかしこい人ぢやあつた。』

福の神も貧乏神もいろ〳〵の所まで廻らしやます事なり、千蔭と云ふ下手よみは、當時日本一の大家じや手もよいようでようはなし、歌は下手なり、文盲也、大黑樣が御入りなされねば、あんな名利の人にやなられぬものぢや。』

芭蕉などいふこしらへ者がよりつける事ぢやなかつた。』

と云つた調子だ。宣長に對する反駁も、一には宣長が大家であつたからであらう。

僧侶と女も、彼には可也氣障なものであつたらしい。大家の偉大に厭味がある樣に(それが、大家自身の罪であるか、但しは之を大家に祭り上げた俗衆の責であるかに就いては彼の關知する所で無かつた)僧と女

との清淨にも厭味があつた。「現世をひろく救はむの大願をおこし給ひて、人のやまひを療したまひ、やまひおこたりぬれば、恩謝にとて金銀をさゝげ持てまゐれるはいさゝかも納め給はず。たゞ絹、綿、調度のたぐひをばいなみ給はず、」と云ふ高僧？や、吹けば飛びさうな「たしなみ」や貞操をそれとなく見せて「感心な人」になりすまして居る女達は、なる程、正直な彼の心に殆どたまらないものであつたらう。彼は其温泉紀行にまでも、婦人の醜惡をあばいてよろこんで居る。——彼はかう云ふ意味で、皮肉な人だつたのである。

彼は又、頗る自由な人であつた樣に見える。彼の思想（もし思想と云ひ得べくは）は、少くとも當時の學界の誰よりも自由であつた。丁度彼の前後に亘つて、國學者と儒者との間に、面白い論爭が起つた、之は眞淵宣長等が當時の儒者を攻擊し、彼等を以て、漢意に囚はれ、我國体の尊貴を忘れたものとなしたのが、そも〳〵のはじまりで、之に對して、儒者の方でも、市川匡麿以下多數の人々が之を駁し、宣長及び門人等が更に之を反駁すると云ふ有樣で、我學界には珍らしい大論戰であつた。今一々之等の論を批評して居るひまはないが、總括して之を云ふと、國學者側の論旨にも、漢學者側と同じ樣な偏見はあつた樣である。尤も當時の樣に、過度に漢意の支配を受けて居た國民を促して、彼等を國民的自覺に導く爲には、當時の國學者達が主張した樣な極端な見解も、事實必要であつたのだらう。併し今日から見れば、どちらも共に偏して居る。謂はゞ何物かに囚はれて居る。

此間に立つて、兩者いづれにもつかず、比較的自由に考へて居るのが秋成である。此方面の彼を窺ふには前記呵茹葭、及び安々言の二書が最も便利であらう。後者は、國學者の復古主義を攻擊したもので、神話、

古代、國家、などに對する彼の見解を知る事が出來る。唯、本書述作の目的が攻擊にある處から、論旨が兎角否定に終つて居て彼の積極的意見を聽く事の出來ないのは遺憾である。要するに、いづれも片々たる小冊子で、二書から彼れの何々觀だの、何々主義だのと云ふ大きなものをひき出す事は殆ど不可能、或は少くとも頗る危險な事であるが、唯、彼が、些の箔を塗る事なしに、有るが儘に此國を觀且つ愛しようとする自由を持つて居た事丈けは其言葉の端々から窺ひ得る樣である。殊に、一方に當時の儒者流の「西土之敎道に淫し、萬理悉皆、彼に出づると思へる」を「無識なり」と斥けながら、他方に於て、國民が外來文明から受けた恩惠を認め、之をすら「皇祖諸神の恩靈と思按すべし」となし、彼の國學者流が、太古の質直を仰慕して西學(儒佛の意)を排し、物の發達を無視して復古を唱道するの誤謬を指摘して、これ畢竟「擬古の遊技也」と喝破した處などは、黨派をはなれて、如實に物を觀ようとする彼の自由さを、最もよく語つて居る。尤も彼が安々言の結末に於て、秀吉其他幕府の治蹟方針に對して、上下の分度なるものを立て、「中人以下不可語上」の語を引いて、庶民階級が之等を評論せむ事を、絕對に不可として居るのは、彼に似合しからぬ、又彼の爲に誠に惜むべき事であつて、吾人は、彼の心が、かう云ふ意外な點で、時代に引かゝつて居るのを見て、そゞろに同情に堪へない次第である。——彼はかう云ふ意味で、自由な人であつたのである。尙、前の皮肉の場合と同じ樣に、此自由の奧にも、彼の正直があるのを忘れてはならぬ。

最後に、彼は頗る幻怪な趣味を持て居た人の樣である。彼の作には、うす暗く、濕つぽい樣な、凄味を帶びた場面がよく出て來る。中でも此味の最も濃いのは、前記雨月物語であらう。之は怪談風の短篇を集めた

ものでゝ、全篇擬古文体を用ゐて居るに係らず、内容乃至讀過後の印象は、同種の他の諸作とは著しく趣を異にして居る。一体、此味は、中世の様な陰暗な時代の作品には、往々にして認められる處であるが、江戸の様に、何となく明るい、と云つても、キラ〳〵輝いて居るのではなくつて、全体が平面的で影の無い様な時代には、頗る求め難い處で、此點に於ても彼は、近世に獨歩して居る。中でも「青頭巾」といふ一篇は、寵童の死に愛着し、其糜爛した屍肉を喫つて發狂して行つた法師を主人公とし、此狂僧の住んで居る、廢寺の物凄い光景を描かうとしたもので、之を、類似の題材を取扱つた、櫻姫全傳や法界坊などに比べると、一は寧ろ可笑味たつぷり、一は、何處までも嚴肅であつて、兩者其明暗の差の甚しいのに驚かざるを得ない。此物語は近路行者の英草紙などゝ共に、初期の讀本として、京傳や馬琴に多大の影響を與へて居る。併し、此幻怪な空氣丈けは、謂はゞ彼の持味であつて、道がの馬琴も、終に自分の畑へ移植する事が出來なかつた。此味はもし成長すれば、一種の神秘的傾向となつて、彼の思想や、藝術にゝモット複雜な色を與へた筈であるのに、吾人は不幸にして、こゝにも伸ぶべくして伸びなかつたものゝ氣の毒さと物足りなさを感ぜざるを得ない。

以上は彼に對する眞の一瞥である。上田秋成といふ「人」の一角に過ぎない。此外にもなほ幾多重要な特性と更に一層多くの欠陷とがあるだらう。其等はすべて他日に讓つて、最後に一言したいのは、かう云ふ氣の毒な人は、從來「狷介不羈」とか「頑僻固陋」とか「奇人」とか極めて簡單に片附けられて居る範圍の中に、まだ〳〵多數にある筈である。彼等は果して、こんな簡便な形容詞の解決に任せて置いてよいものであらうか。

眞に自由な、又過去から未來に向つて驀直に生きて行く日本の民族乃至其文化を考察する場合に平氣で除外して置いてよいものであらうか、と云ふ事である。

（七、五、二四）

幻住庵の趾を尋ねて

一、二、甲二　今田銕金

▲旅と追憶

ワイマルに於ける不安と煩悶とに裏切りて、伊太利の風光に憬れしゲーテは、歸來復活の喜びに滿ちて曰く、「此旅行によりて、予は予自身を詩人として再び見出しぬ」。と、ガルタ湖の風光に、エロナの劇場に、ヴエニスに於ける夜のゴンドラの歌調に、兎に角、實物によりて、自分を知り得たる一年の羅馬生活は、以前の概念をして恰も子供の靴の如くに見せしめたりしなり。實にや、旅ばかり生活の色彩を變化さするものはあらじ。依然たる山河、綿々たる傳說、旅によりて活き、旅によりて解し、而して旅によりて歌はる。詩人は旅にさすらひ、自然の現象に驚異し、讃嘆し、終に杖と笠とに老を刻みゆかん事をさへ願ふなり。されど皆これ追憶の涙によりて濕ふ。追憶無き旅は無趣味也。無趣味の旅は、無情なり。無情の旅は人形の旅のみ。吾はこれを以て旅とは言はざるなり。歷史と傳說とによりて充たされたる自然の現象は、そが美景絕勝の外に一種の靈感を具ふるものあればなり。眞に旅人は詩人なり。山館野亭、或は古墳を弔ひ、英雄美人の爲めに流涕し、或は造化の妙を讃美し、古今の傳說に耳を傾け、古典的氣分に心を洗ふ。狂と言はゞ狂なり